競争より"協調"で街づくり

恵比寿は"住みたい街"の上位（恵比寿ガーデンプレイス）

トップインタビュー

髙島 英也氏（サッポロビール㈱ 代表取締役社長）

恵比寿は首都圏で"住みやすい街"のランキング上位の常連だ。その恵比寿にある恵比寿ガーデンプレイスは名所スポットのひとつ。モダンで"瀟洒な風景"が恵比寿の街を包みこんでいる。1994年、サッポロ恵比寿工場の跡地に完成して以来、"大人の街"として存在感を放っている。そしてサッポロビールは恵比寿の活性化に寄与すべく「地域共生」の取り組みを進めている。本年1月にサッポロビール社長に就任した髙島英也氏も"ごみ拾い"で地域のボランティア活動に参加している。"凡事徹底"をモットーに飾らぬ人柄がいい。農耕民族にこそ日本人の心の原点があると"自然派"を自称している。

―恵比寿は首都圏の住みたい街のランキング上位にあがる人気があります。御社が事業主体となって再開発された「恵比寿ガーデンプレイス」が貢献していますね。

髙島　単に建物を造るだけでなく一体開発できたことで素晴らしい街になりました。関係者の街さんには本当に感謝しています。

―新宿や渋谷、丸の内、銀座、それにこの恵比寿をはじめ都市間競争が激化しています。

髙島　競争の結果、東京の街がさらに良くなることを願っていますが、そのためには競争は相手を叩き潰すのではなく、"協調"に近いものでなくてはいけないと思います。日本人が本来持っていた農耕民族的な協調性は今も生きていると感じています。それこそが世界に伍して競争できる源泉になるのではないかと考えます。また私はサッポロビールの社長ですから、飲食店の街さんが気持ちよく商売していける街でもあってほしいですね。

―ご出身は福島ですね。都市と現方の違いを、どう感じていますか。

髙島　学生時代は仙台で過ごし就職して東京、仙台、大阪など様々な地域に行きました。都市か地方かということでは私の想いは地方にあります。田舎は総じて疲弊していると言われますが場所によっては人々が実に生き生きとしている。人口が千3百人、農業従事者の平均年齢が70歳の里山で私は今、田んぼづくりをさせてもらっています。今年で9年になります。種をまき苗床をつくり、田植え、それから草取り、これが何といっても大事です。そして10月初旬に収穫となるのですが、このプロセスはなるほどすごいと思いますし、こういう経験をすることでコメの一粒一粒を大事にしようという気持ちが生まれるんだと実感します。またこの里山では独特の公共的な感性を持った人たちに出会えます。田んぼから排水する、その先にはダムがあるのですが、このダムから流される水が仙台市民の水道水になっている。そのことを考えれば残留性の強力少ない低農薬で農業をしようと実践している。或いは山の間伐材を炭にして、農業用水路に敷き詰めてくれる。大雨が降って流されてしまえば、また敷き詰めてくれる。なんとも有難い。こういう"他を思いやる精神"に共感して一緒に農業をさせてもらっています。実に学びが多いですね。先ほど「協調性」の大切さを話しましたが、こうした"公共心に基づく協調性"が都市部にも、もっと必要ではないかと思います。

―公共心といえば忙しい中でも街のゴミ拾い等ボランティア活動をされていると聞きます。

髙島　先日も当社からゴミ拾いの案内があったので参加してきました。ゴミ拾いをすると実に気持ちがいい。好きなんです。ただゴミ拾いを通して心配な点も垣間見えます。雨上がりの公園でゴミを拾っていたのですが、水たまりにタバコの吸い殻が何本も捨てられていました。さらにその場でタバコを吸い続けている人がいる。嫌味にならないようにスッと火ばさみで吸い殻を取り除いたのですが、こうした自己中心的な事象をしばしば見かけます。少なくとも公共の場をどのように使うかということについて一人ひとりがもっと意識を高めてほしいと思います。

―「協働契約栽培」をされていますが、農家の方たちとの信頼関係が基になっているのですか。

髙島　明治9年に当社の前身である開拓使麦酒醸造所を作った当初から北海道の農業振興を目的にしてきました。農産物であるビール大麦から作った麦芽と、ホップを原材料にして「ビール」という付加価値のあるものをつくる。麦芽とホップの「協働契約栽培100%」を達成したのは2006年ですが、実はそのずっと以前から私どもは農家の皆さんと一緒になって取り組んできたのです。これがサッポロビールのDNAだと思っています。

―新宿の企業人が集う「新宿サッポロ会」が今春の開催で百47回を数えましたね。

髙島　新宿駅で分断されている東と西の交流をもっと進めようとの思いで始まったと聞いています。既に53年、長い歴史を刻んできました。新宿をごよなく愛する方たちがビールで乾杯し、おいしい料理に舌鼓を打ち歓談し互いに親睦を深め合う。他に目的がある訳じゃない。でもそれがいい。そして願わくば"いざという時"には会の皆さんが結束して例えば「地域のために一肌脱ごうじゃないか」と動く。このサッポロ会がそんな原動力になれば最高です。

―「サッポロ会」は目黒でも開催されているようですが他の地域でも？

髙島　当社の創業地である北海道の「サッポロビール会」は一年間で12回、毎月開催しています。明治の時代に始まって、戦争で一時中断しましたが累計では千回以上開催していることになります。この会も実に楽しい。全部で約5百名の会員のうち、会に出席するのは2百名程です。乾杯は一緒に後はそれぞれ楽しんで思い思いに帰っていく。このような会は当社サッポロビールが仕切っているのではありません。企業の方、大学の先生、弁護士など様々な方たちで組織する世話人会が運営しているんです。私どもは事務局として金銭管理や会場の手配などをさせてもらっています。会員の皆さんが開催したくて続けているからこそ本当に魅力あるサッポロ会になっていると思います。

―「凡事徹底」が信条と聞いています。

髙島　当たり前のことがキチンとできるようになる、或いは何か課題に直面した時に如何に解決していくか、その力の源泉というものが凡事の積み重ねではないかと思っています。企業が挙げる成果も"凡事の塊"だとつくづく思います。この凡事を日々少しずつ進化させることが「改革」や「イノベーション」のベースになる。いきなり「何かイノベーションを起こせ！」と言っても何も生まれませんよ。当社を振り返ってもやはりそこに至る下地づくり、裾野の拡充を相当しっかりしていないとイノベーションなど起こせないことはっきりしています。1977年に熱処理をしないビール「サッポロびん生」を発売しましたがこれができたのは、それまでの小さな凡事、例えばホースの撒き方から床をデッキブラシでどのように洗えばよいかといったことまで含め、まさに凡事の集まりの結果なんです。2008年、それまで品種の交配・選別を繰り返す「育種」を長年続けて開発された「LOXレス大麦」がカナダで商業生産できるようになった。香りと味が変化しにくく当社の製品の原料として使えるスケールにまで育てられるようになった。これも凡事を積み重ねてきた当社の長い歴史があってこそ。このことを当社の人間全員に感じてほしいと思います。

競争より"協調"で街を活性化

里山で実感する豊かな"公共心"

しなやかな結束育む"サッポロ会"

「凡事徹底」の進化で「改革」を！

（プロフィール）昭和34年生、福島県出身。昭和57年東北大学農学部卒業、サッポロビール㈱に入社。取締役兼執行役員経営戦略本部長、常務執行役員北海道本部長などを歴任。平成27年ポッカサッポロフード&ビバレッジ㈱取締役専務執行役員。平成29年1月サッポロビール㈱代表取締役社長、同年3月サッポロホールディングス（株）常務グループ執行役員に就任。

飲酒は20歳になってから。飲酒運転は法律で禁止されています。　www.sapporobeer.jp　サッポロビール株式会社